

## ミンガラードン・ゼイ駅 軍・警察のための市場

山形洋一

**鉄道移築で駅は市場から遠くなった。田んぼを挟んだ丘に上の市場では軍・警察関連の装備品が売られている。内戦に備えられた膨大な数の品々**

「ゼイ」とは市場の意味で、YCDC（ヤンゴン市開発委員会）発行のヤンゴン市地図帳の索引によれば、ヤンゴン市全体をあわせて129箇所ものゼイ（公設市場）があるという。その多くはバス停の名にも用いられているが、鉄道の駅で「ゼイ」とつくのはここだけだ。

市場に隣接した駅ならいくつかあり、中でもタマイン駅とダニンゴーン駅は、市場の混雑と熱気がプラットフォームにあふれだしている。そんな熱気を期待して「ミンガラードン市場駅」に来てみると、あっけにとられるだろう。空芯菜の田圃の真ん中に、小さな駅舎がぼつんと立ち、乗降客もわずかしかない。空港拡張にともなう鉄道線路のつけ替えで、駅が市場から遠ざけられたのだ。



駅から市場までは1キロ足らず。荷物を持ったおばさんたちは駅前で待つバイク・タクシーの後に乗って出かける。数台しかないバイクはすぐに出払ってしまうが、待っていれば間もなく

引き返してくる。だが荷物がなければバイクを待つまでもなく、のんびり歩けばよい。

駅から田圃の中のをあぜ道を西へたどると、ジョーピュー上水道の太いパイプにぶつかる。梯子段でパイプを乗り越えた先は空き地で、パイプ沿いに延びた砂地では女たちが魚を干している。そこだけ見ればまるで砂浜のようだ。



市場で売られているのは、どこにでもある食糧や日用雑貨など。だが木と竹むしろの家並みの間をくぐり、左（南）に折れるとミシンの音が聞こえだし、紺やカーキ色の制服をつくる縫製工場に行き着く。縫いあげられた制服類を売る商店も並び、警官の制服、ブーツ、ピストルホルダー、階級章なども売られている。ミンガラードンの兵営に近いこの市場は、軍装品や警察関連の品物の集散地なのだ。

カーキ色が支配する光景は、私のように米軍放出品に頼って山登りを始めた世代には、ちょっと懐かしい。当時数すくなかった登山用品

品店では、米軍払下げの寝袋や防寒具、折りたたみスコップ、水筒、固形燃料などが幅を利かせていた。寝袋の中には戦死者の遺体輸送に使われたものもある、と不気味なうわさも耳にしたが、背に腹は代えられず、軍用品に独特の機能的デザインにひそかな憧れすらもったものだ。

軍需物資の機能性は万国共通だ。ミンガラードン市場を冷やかして歩いていると、精気を持て余していた少年時代の気分がよみがえってくる。だがここは戦後の日本ではなく、内戦の余塵がおさまらぬミャンマーで、これらの武器の標的となるのは、日本書紀にあてはめれば「国栖（くず）・隼人・土蜘蛛」といった「まつろわぬ民」たちだ。ヤンゴンで日常感じる事のない血なまぐさが、この市場には潜んでいる。

（了）